

〈名分〉と〈負〉の美学

短大園劇部長

高橋新太郎

〈名分〉を背負った女性の強さはさることながら、義理ある継子を救おうとする、その〈正〉を背負っての「心にもない不義いたずら」と言わんより、むしろ俊徳に仕掛けた業病の本復に、おのれの血の供犠を必然とする玉手の暗い情念の底には、死のエクスタシー願望が潜む。〈名分〉に隠れた、憎からず思いう心の奔流がある。

不倫の恋の切実と、業病に結ばれた寅蔵の迷信を飾れる故に、大阪その他の地で上演が禁じられた時代もあるという。

園劇部の公演年表を見ると、昭和十五年の読売ホール、二十九年の三越劇場、四七年の厚生年金会館、五四年・六一年の豊島公会堂につぐ六度目の「合邦」公演である。

毎度のことながら、市川右之助丈の格別の御指導と、関係諸師の有難い御理解と御協力で支えられて今日の公演を迎える。今回は使い慣れた豊島公会堂から日暮里のサニーホールでの公演となったため、とりわけ大道貝の諸師にお骨折り頂いたと聞く。

皆様の御厚志に応えるためにも、日頃の精進をぜひ実らせたい。

高橋新太郎（人文学教授）